

平成 20 年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
第 2 回森林生態系部会
議事概要

◆日 時 平成 20 年 12 月 16 日 (火) 13:00~16:00

◆場 所 奈良県文化会館 多目的室 B1

◆出席者

<委 員>

川瀬 浩	日本野鳥の会奈良支部 支部長
佐久間大輔	大阪市立自然史博物館 学芸員
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
日比 伸子	橿原市昆虫館 資料学芸係長
前田 喜四雄	奈良教育大学教育学部附属 自然環境教育センター 教授
松井 淳	奈良教育大学 教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学 准教授

(以上敬称略)

<関係機関> 林野庁近畿中国森林管理局

計画部計画課 波多野 宗正 課長補佐
箕面森林環境保全ふれあいセンター 上村邦雄 自然再生指導官

<事務局>

近畿地方環境事務所	瀬川 俊郎	近畿地方環境事務所長
	田邊 仁	統括自然保護企画官
	高橋 勝志	野生生物課長
	松井 裕	自然再生企画官
	角 智則	自然保護官
吉野自然保護官事務所	濱名功太郎	自然保護官
(財) 自然環境研究センター	永津 雅人	第2研究部長
	千葉かおり	第2研究部部長代理
	岸本 年郎	研究員
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志	環境部リーダー
	保延 香代	環境部リーダー

◆議 事

1. 第1期森林生態系保全再生計画の評価について
2. 第2期森林生態系保全再生計画の目標及び骨子案について

◆事務局より資料第1章～順次説明

① 第3章「対象区域内の現状と課題」 1. 森林の現状と課題

- ・ 東大台の森林衰退の経緯について、今回示されている文章からは東大台の正木峠周辺にミヤコザサ草地が広がった結果として、ニホンジカが増加したとされているが、ニホンジカはミヤコザサ增加の初期要因として関与しているのではないか。また、利用による人為的な影響の中に、ドライブウェイの法面植生がニホンジカのエサとなっていることも示しておくこと。
- ・ 西大台の森林衰退の要因として、自然的、人為的な影響により下層植生が欠落したとされているが、人為的な影響による下層植生の衰退については今までに見解がなかったのではないか？このことを示すデータがない状態で、ここまで踏み込んで示す必要はない。

→第3章P5下から3行目「やはり自然的、人為的な影響により」を削除する。

- ・ 野生動植物の生息状況と保全上注目すべき種については、希少種の減少を問題提起するのであれば、現在までに確認されている希少種全てを示しておく方がよい。
→第1章の生物相の項目で示す。
- ・ 大台ヶ原における保全上注目すべき種の例としてヨタカを挙げているが、大台ヶ原はヨタカの生息域としては標高が高すぎる。最近の調査でも確認されていないため、ここでは削除しておいた方がよい。
- ・ 哺乳類のレッドリストのランクを修正しておくこと。

② 森林再生ポテンシャルの評価

- ・ 植生タイプIにおける森林を回復するための人為的な措置として、播種に加えて植栽も加えておく。
- ・ 植生タイプの標記として、植生タイプIとすると具体的な植生がわからないため、ミヤコザサ型（植生タイプI）と表記する方がよいのではないか。

③ 第1期計画に基づく取組の評価

- ・ 防鹿柵の設置目的の記載内容がわかりにくい。目的はあくまでもニホンジカによる採食からの保護であり、その保護対象がトウヒ林→下層植生→多様性（希少植物等）と変化してきたことがわかるように記載する。
- ・ 大規模防鹿柵に加えて、パッチディフェンス、小規模防鹿柵についても実施状況（設置数、大きさなど）、実施目的を記載しておく。
- ・ 防鹿柵については、多様な目的で設置していることを示しておくこと。
- ・ ラス巻きについては、樹幹着生蘚苔類へのマイナス面があることも示し、ラスの素材について検討すべきことを示しておくこと。

- ・ 実証実験における地表処理の評価として、「無処理区に比較すると地表処理をした方が実生の発芽・定着に効果がある」ことしか示していないが、地表処理別の効果の差、発芽・定着する樹種別の効果の差などについても、評価を与えるには次期尚早であるということを示しておく。
- ・ 実証実験の目的と実験の内容については、評価することは出来なくても示しておくこと。
- ・ 「野生動物調査の評価」という表題は不適切である。見直しておくこと。
- ・ 植生タイプ毎のネズミ類の出現状況（平成18年）の結果について、名古屋大学のグループの論文との整合性を見直しておくこと。
- ・ 野生動物調査結果の示し方として、「鳥類調査では～のような変化が見られた。その要因は～である。」といった表現に統一しておくこと。
- ・ 次回の動物ワーキンググループまでに、昆虫調査結果の類似度については防鹿柵の内外をまとめて植生タイプ間で比較しておく。また、調査方法（頻度、時期）の評価をしておく。

④ 森林生態系保全再生に係る課題

- ・ 森林生態系保全再生の考え方として、森林の更新過程と更新ステージ（段階）を明確にし、わかりやすく表現しておくこと。
- ・ 損なわれている更新過程について、植生タイプII～VIIでは成木（母樹）は更新ステージとして損なわれてはいないが、ニホンジカによる影響（剥皮）を受けていることは示しておく方がよい。
- ・ 森林生態系保全再生に係る課題のまとめ方はこれでよい。
- ・ 自然再生として、ノウサギ、ネズミなどの小動物の影響に対してまでも対策をすべきなのかという点については、疑問も残る。
- ・ ニホンジカ、ノウサギ、ネズミなどの野生動物の影響については、「過剰な」影響が問題なのである。

⑤ 第4章「自然再生の基本的な考え方」

- ・ 「4. 関係者の連携」について、三重県、林野庁も含めておく。
- ・ 「5. 成果の活用と普及啓発の促進」について、「技術的な情報の積極的な発信」については、「情報提供の充実」と並列に示しておくこと。改行して示しておく。
- ・ 第1期計画で示した「総合的な取組」についても示しておくこと。
→「1. 大台ヶ原の特性と復元力を踏まえた取組の実施」がこれに当たるため、表題を「1. 総合的な取組の実施」とする。

⑥ 第5章「自然再生の目標」

- ・ 長期目標の中にニホンジカの適正密度の維持を触れておかなくてよいのか？

→「天然更新により後継樹が健全に生育していた」といった表現の中に含まれていると考えられるため、この表現のままでよい。

→シカのことについてはどこかで書かないといけない

- ・ 目指す自然の姿についての文章が長すぎてわかりにくい。植生を並記する場合は文章を「、」で切ってわかりやすくしておく。
- ・ 植生のことだけに偏っているので植生状況ではなく動物を含めた生態系の状況ということをしめした方がよい。
- ・ 中期目標の「(2) ニホンジカ個体群の保護管理」で示す目標は、いまシカの密度が適正でないので「ニホンジカ個体群の適正な生息密度の維持」ではなく、「適正な生息密度への誘導」とする。
- ・ 森林生態系保全再生にニホンジカ個体群の保護管理、新しい利用のあり方についても組み込まれるべきものだと思う。総合的にするべきかと思う。今後、ワーキング等でたたいたらどうか。

⑦ 第6章「目標達成のために実施する取組と評価方法（短期目標）」

- ・ 「①大台ヶ原を特徴づける森林生態系の保全に向けた取組」の中で示している大台ヶ原を特徴づける森林生態系は「衰退が進んでいる等緊急に保全が必要となる箇所」ではなく、「衰退が進んでいる場所、緊急に保全が必要となる場所」と2つに分けておく。
- ・ 「②森林更新環境の回復」の中で示している「過剰な動物の影響や菌害からの保護による実生の成長促進」については、「保護」ではなく「抑制」としておく。
- ・ 「③森林後退の抑制」についてはオープンランド全てを問題にするのであれば、正木峠周辺に限定しない方がよい。
- ・ 「森林後退」の言葉がわかりにくい。イメージできる写真を示すなどした方がよいのではないか。
- ・ 横断的取組について、得られた成果の活用として図鑑の作成、ガイド養成などを示しておく。また、昆虫標本の活用法などについて、地域の関係機関と連携することなどを具体的に示しておく。

⑧ 付録

- ・ 植物相リストの中に蘚苔類リストを含めておく。土永先生がまとめられたリストを既存文献として示し、利用部会で調査した蘚苔類調査結果と合わせて示しておく。

[文責：近畿地方環境事務所]